野いばらの衣

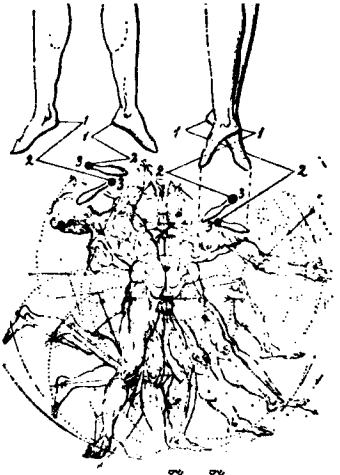
三木卓

講談社

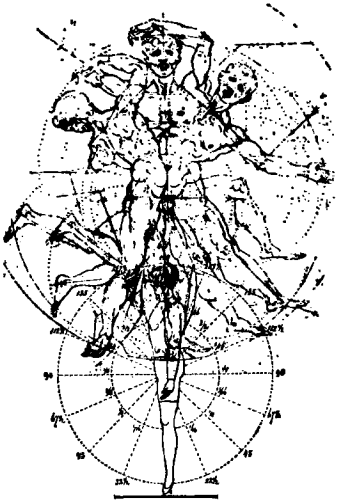
野いばらの衣

三木卓

講談社



野いばらの衣　著者—三木　卓　定価一二〇〇円
昭和五十四年六月二十八日第一刷
発行者—野間省一　造本—杉浦康平
発行所—株式会社講談社　東京都文京区音羽二—十二—二十一　郵便番号一一二
電話東京(〇三)九四五—一一一一(大代表)　振替東京八—三九三〇
印刷所—豊国印刷株式会社　製本所—黒柳製本株式会社
乱丁本・落丁本はお取り替えいたします。
© 三木　卓　昭和五十四年　Printed in Japan
0093-163622-2253(0)(文1)



野いばらの衣

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

1

液のなかに浸された白紙をゆっくり揺すっていると、微かな淡い翳が、紙のあちこちに現われてくる。もう幾年も現像・焼付をやっているのに、この瞬間が好きだった。

翳は濃淡をつくりながら拡がっていき、しだいにもののかたちを現わした。暗い曲線が画面を大きく横切っていた。わたしはゆっくりと印画紙をゆすった。木洩れ日のような斑点が下部にひろがっていき、やがて夜光虫にきらめく暗い夜の海になった。水平線があって、その上部は満月の光の溢れた空だった。銀色に輝く雲の浮いている空は画面の大半を占めていた。

それを背景にしてシルエットになった女のすんなりとした足が、画面の斜め上から水面すれすれに伸びていた。爪先で暗い輝きを秘めた水とたわむれる寸前だった。

印画紙をとり出し、濡れているまま画像をながめた。足は太股の付根から暗黒のなかに溶けこんでいたが、その暗闇のなかへ靴下留めの吊り金具が足にそって上部に伸びていた。留め金には

靴下がかかり、その靴下は足をしっとりと包んでいた。わたしは目を細くして靴下の内部の肉を見ようとした。太股は太すぎず、膝頭の丸みもこぢんまりしていて可愛らしかった。膝をすぎても曲がらず、軽快な線が一気に爪先まで達していた。まるで足の見本のようだ、と思った。

現像室から外へ出た。窓はみな暗くなっていた。わたしはライトのそばのキャンバスを貼った椅子を押して部屋の真中に出してから腰を下ろした。目を閉じると、わたしはまだ現像しているのだった。もののかたちが光と影になってゆらゆら揺れながら浮びあがってきた。すべてのものは光と影になってしまい、その時のそのままの姿で定着されてしまう。生えかけている歯のかたちも、剃刀で裂かれた痕も、握りしめているこぶしの激情も。

生活のためにDP屋をしていた頃には、毎日夥しい枚数の現像をした。わたしは暗室にこもって焼芋でもやくように次から次へと黒白写真を現像した。人はわたしを写真屋だと思っているから平気で生活を封じこんであるマガジンを渡す。わたしは、暗室のなかで、それらの人々の生活を覗きみた。かれがどのような神棚や箪笥、冷蔵庫やテレビジョンを持っているかはもとより、どの相撲取りのファンであるか、どこの会社の痔の坐薬を使っているかといったことまで判ってしまう。いや、そればかりではない。一人の女が小手をかざして眩しそうにカメラの方向を見つめて立っている。それだけで女が撮影者とどのようなかかわりのある者であるか、推察できてしまう。そして、カメラを向けてシャッターを押している者の心のうちもわかる。

しかし、そういうことに関心を持っていられたのは、最初の頃のことだけだった。飽いた、というのではない。堪えられなくなったからだ。素人の写真は鈍感だから、写してはならぬものを写してしまう。中年過ぎの疲れた内臓を持っている人間が、自分でそれと気づかないで他人に生臭い息を吹きかけてしまうように、みじめな生活を丸出しにする。わたしは数ヵ月もすると見な

いですませるようになった。一本現像すればいくらいくらで、サービス判で焼けば一枚いくらいくらだ。ほい、一丁あがり。もともとそういう商売なのだ。

しかし、中にはどうしても心にかかる写真もあった。わたしが見ることが出来るのは枠のなかにおさまった映像だけだから、その外に食み出してしまったものは容赦なく断ちきられてしまう。あとは想像するよりない。またその映像が何を意味するのか理解できないものもある。そのようなとき、人の現実の奥深さを感じないではいられない。

まだ開店していくらもたたない頃のことで今なお忘れられぬフィルムがある。推察するところ近くの公団住宅に住む者のフィルムらしかったが、かれはハーフサイズのカメラで一本、つまり七十二コマを一人の少女を撮影することに費やしていた。その少女を——おそらく娘としてひどく愛していたのだろう。かれは五度も撮影場所をかえ、少女もその都度衣裳をかえていた。

少女は愛らしかった。すこし痩せすぎているようにも見えたが、切れ長の目とひきしまった唇はするどい緊張をあらわしていて、この子の内部にあるものを予感させた。わたしは一度も見かけた記憶がないのであるいはこのあたりの子ではなかったのかもしれない。

少女はさまざまなポーズをとっていた。気どったり、ふざけたり、深刻めかしたり、胸を張ったりしていた。わたしは、その変化に才気を感じ、ひどく興味を惹かれるのをおぼえた。あるいはどこかの劇団にでも所属しているのだろうか、と思ったが、すぐにそうではないだろうと思った。彼女が大胆なのは、自分を深く愛してくれている者の前だからなのだ。画面には一度も登場してこないシャッターの主を彼女が絶対的に信頼しているからなのだった。その相手が男であることぐらいすぐ判らなくてどうしよう。わたしは、その男の力を強く感じないではいられなかった。少女は愛している者の前でしか見せない、自然さを流露していたし、信頼し得る相手に不安

をあずけてしまっていたので輝かしかった。
そして不審に思ったことがあった。それは、少女がしばしば右肩を前につきだすようにしてポーズをつけている、ということである。はじめは、少女の得意のポーズなのだろうと思っていた。しかし数十枚のネガをルーペで拡大して頭が痛くなるほど見た結果、そうではない、ということが判った。そして見終ったときわたしは吐息をついた。どのコマにも少女の顔の左半分はまともにうつっていないのである。
何故そうなっているのか。わたしはふたたび探索をはじめた。手札の紙焼きをつくってしらべた結果、わかったのは、問題は頬や耳ではなく左顎にあるらしい、ということだった。顎の発育が片側だけおくれている、というふしがあった。しかし、それもわたしだから辛うじて感づいた、という程度のもので確実な証拠を見つけ出すことは、このフィルムからはとうてい不可能だった。わたしは、あらためてこの少女に強く惹かれるものをおぼえた。
たとえば一枚の写真では、少女は、夕方の団地の鉄棒に両脚をひっかけて、こうもりのようにぶらさがっている。逆吊りになったままの姿勢で撮影者の方を見て楽しくてたまらない、というように笑っている。本来なら顔は正面になるような位置にいるのに、首はわずかにねじまげられていて左側は暗くなっていた。
少女がどれだけカメラのことを知っているかわからない。しかしそのような姿勢をとっているときですら仮借ないカメラから自分を守る才能はおそろしいほどだった。そして少女は、そのようにして得られた自分の像に対して絶対の自信を持っていた。事実、それはすばらしかった。
はじめ、そのことに気づいたとき、少女がこのような写真をとらせたことを不審に思った。だが、今は判った。少女は日常生活のなかでは臆病な兎のようにして暮しているかもしれない。そ

こでは少女は自分を隠すことはできない。しかし写真の中では完結した自分の美しい姿を、それも自信のある姿をつくりあげることができる。写真を裏返してみたってそこに裏の部分がうつっているわけではない。ここは少女の王国なのだ。

少女に会ってみたい、とわたしは思った。わたしに判っているのは現像依頼人の苗字と中年の風采のあがらない小男の顔だけだった。フィルムを取りに来たとき、それとなく訊いてみようか、とも思った。しかし、会ってどうするのだろう？　会ったってしようがないではないか？　ためらいながら依頼人の現われるのを待った。しかし約束の期日が来ても引き取り手は来なかった。よくあることだったが、この場合は多少意外だった。幾日か過ぎて、わたしが自動車教習所からもどってくると、フィルムと紙焼きはその留守のあいだに持ち去られていた。

あの少女はどうなったろう？　たしか内緒で焼いておいたキャビネ判が数枚、どこかにはいっているはずだ……。

わたしは立上って左足を引きずりながら台所へ行った。冷蔵庫をあけてカップ入りの冷用酒をだし、冷えたレタスの塊に庖丁を入れて三分の二ほどを切りおとしたものを皿に載せた。それを両手にもって跛をひきながら戻ってきた。咽喉はからからに乾いていて冷たい飲みものを欲していた。金属箔を剝がして蓋をあけ、飲んだ。咽喉がいやされ、胃がゆっくりと熱くなってくるのが判った。あんまり酒を飲まない方がいいのだが、この一口の醸し出す優しい落着きのことはどうしても忘れることはできない、と思った。

手をのばして室内の灯を消した。暗かった窓があかるくなり、部屋のなかは、赤黒い闇で充たされた。一九七五年の冬の夜は更けていった。わたしは闇に沈んでいた。外の道をひっきりなしに走りすぎていく自動車の騒音が心なし烈しくなったように思われ、遠くの部屋から英語で少年

がうたをうたっている声がきこえた。それを聞いていると、どっと疲労が襲ってきた。〈今日は、……今日はこれで終りだ〉わたしは思った。〈明日は、明日はどういうことになるんだ？〉わたしはカップの酒をぐい、と飲んだ。〈明日は、木宮に会わなければならない……〉

木宮真樹のとがった顎が浮びあがってきた。今日の夕方、わたしは二十年ぶりで思いがけなくかれに出会ったのだが、あの特徴的な顎は変っていなかった。ただ、あの活力の溢れた鋭い眼はもうなかった。頭は禿げていたし、顔色もよくなかった。唇の周囲から顎にかけて、木宮の筋肉は微妙な変化を見せて表情を伝えたものだったが、その機能は衰えているというほどではなかった。商船大学の航海科へ進学したわたしの友人は、高校での体育主任だった木宮を男らしい、と評した。しかし、本当にそうだったろうか？　わたしには、あの筋肉の動きが逞しければ逞しいほど酷薄なものとしてしか見えなかったことを思いだした。事実、わたしにとってはそれ以外のものではなかった。

今日の午後、日本体操連盟に出掛けていったのは、木宮に会うためなどではなかった。女子の体操のナショナル・チームの練習の撮影許可を貰うためだった。外務省関係の海外むけ宣伝誌のための仕事だった。衝立で仕切られただけの応接室で待っていると、理事らしい男が自分の名刺をつまみながら入ってきた。かれは、わたしのすぐ前まで来てから、ひょい、と顔をあげた。

電燈の赤い光の下に浮びあがった男の顎のかたちに見おぼえがある、と感じたが、それが木宮である、ということに気づくまでにはすこし時間がかかった。わたしが年をとるのと同じだけかれもまた年をとっていたのだし、それにわたしは予期していなかったからだ。しかし、そうだと判った次の瞬間、わたしは自分の顔から血の気がひいていくのを覚えた。思わず咽喉が鳴り、低い声を発した。立上りながら身がまえていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

名刺を渡そうとしてもいっこうに受けとる気配のないわたしに不審なものを感じたのだろうか。男は、おや、という態度でわたしを見直した。瞳孔が小さくなった。わたしを記憶しているだろうか？　忘れているはずはなかった。わたしは心をきめてまともに男の眼を見返した。男の眼が動き、唇のへりが弛んだ。顎が微かに突き出された。そうだ。いつものあの感触だ。かれはわたしを覚えていた。思い出したのだ。

「郡司。郡司じゃないか……」

「ええ。先生」

わたしは丁寧にいった。木宮はいった。

「郡司……」

木宮の声はおどろきを現わしていたが、懐しさは帯びていなかった。かれはわたしに腰かけるようにすすめ、それから衝立の外の女の子を大声で呼んでコーヒーを頼んだ。声の調子も質も変っていなかったが、物腰はめっきり如才なくなっていた。わたしはポケットからハンケチを出して額の汗をぬぐった。予期しない出会いで心臓がとどろいていた。こうなってみれば、木宮がここにいることは別に不思議でもなんでもない。しかし、そんなことまでどうして考えに入れることが出来るだろうか。わたしはハンケチをポケットに入れ煙草をとり出してマッチを擦った。指が震えるといやだな、と思った。

「幾年ぶりかね。かれこれ二十年だな。そうだろう」

「ええ。まあ二十年です」

木宮は注意深いまなざしで、暗緑色のアノラックを着、器材を入れた銀色の金属トランクをさげて立っているわたしを見た。その態度には落着きがあって、わたしに会って困っているとか、

狼狽しているとかいう様子はなかった。
「写真家になられた。そうだったな。聞いていたよ。なんでも、いい賞をとったというはなしだったね。外国の」
かれは煙草に火をつけて吸いこみ、咳をした。体調はあまりよくないように見えた。わたしは手の甲を見た。肌の色も暗くて静脈が小さな蛇のように這っていた。〈やっぱり、おれのことを気にしていたのだ〉わたしはそう思いながら煙草の煙を吐き出した。〈そりゃそうだろう。あんな目に会わせたのだから〉「いや、よかった」木宮はさり気ない声でそういった。「まあ郡司のことだからね。それぐらいのことはする、とは思っていたけれども」
木宮はそういうと一人で頷いた。わたしは黙っていた。下腹がたるんでいるな、と思った。すでに六十になるはずだった。二十年前には精悍そのものだった木宮だったが、やはり時の流れにはさからえない。わたしは木宮のあちこちに肉体の変化を見出し、そのたびによろこびを感じた。あのころにくらべれば今はわたしの立場も悪くはない。なにも恐れることはないのだ。
「それで、撮影の件ですけれども……」わたしは無表情な声でいった。「書類にしてきましたので、よろしくお願いしたいのですけれども……」
「撮影？」かれは我に返ったという声で呟いた。「ああ、そりゃまあかまわない。しかし、郡司、それはそうとして、どうだ、今夜はひまか？」
「いいえ」わたしは無表情な声でいった。「このところ、ちょっと忙しいので」
「じゃ、明日の晩は？　な、いいだろう。一緒に飯でも喰おう。どうだ？」
「忙しいんですよ」
わたしは迷惑だ、という声を作っていった。木宮は頷いた。判った、というしるしだった。か

れは煙草をひねり潰しながら、ちら、とわたしを見た。その目は光っていた。
「忙しいのは判っている」かれはいった。「しかし、おれはあんたに一度会いたいと思っていたんだよ。一度会いたいとね。あんただってそう思っていたんじゃないのか？」
すぐには返事できなかった。すぐ答えればそうだ、といってしまいそうだった。木宮はそんなわたしをじっと見つめていた。心が揺れうごくのを感じた。
「今さら会って、何を喋るんです？」わたしはいった。「また、憎みあうんですか。もう一度退学させようっていうんですか。無理ですよ」「何をいう」かれは困惑した、というように笑顔をつくった。「おれは退学させようと思ったことなんか、一度もなかったよ」
わたしは黙ってうつむいていた。木宮はまたあたらしい煙草に火をつけ、一口吸うと煙草盆の上に置いた。
「一度、きちんと話すべきだと思っている。あんたは、それをおれに要求しているはずだ。おれはそれを感じるからいうんだ。おれもまた、あんたに要求している。今なら話しあえると思う」
「わたしが応じなかったら、撮影許可は呉れませんね？」わたしは皮肉な笑いを精いっぱい浮べながらいった。かれは、そんなわたしをまぶしそうに見つめた。「さあ、そんなつもりはなかったが」かれはゆっくりといった。「あんたがそんなことをいったので、そうだ、といってみようかな、という気になるかもしれない」「それは困ります。わたしはどうしても撮影させてもらわなければならない」
「これも、撮影打ちあわせの仕事の一部と考えるがどうかね？」かれは笑いながらいった。「明日の午前十一時に、あんたのオフィスに電話を入れるよ。よろしくたのむ」
わたしは頷かないで立ちあがった。木宮も立ちあがった。その気配でかれが、自信を持ってい

ることがわかった。わたしは部屋を出た。
酒を底まで飲みつくしたので、カップを床にすてた。カップは倒れて床の上を大きな円をゆっくりと描いてころがっていった。わたしは微かに見える暗いカップのかたちを眼で追った。カップは小さな音をたてながら百八十度以上をまわりきり、今度はわたしの方に向って接近する円周上を動いていたが、やがてしだいにのろくなっていき遂に止った。そして今度は逆に今来たコースを、わたしから遠ざかりながら戻っていった。床が傾いているのかもしれなかった。速度も音も次第に速く、大きくなっていった。
今襲われている疲労感は、木宮に会ったせいだ、と思った。そのために、できるなら忘れていたいと願っていたことが、目をさまし、暗闇のなかで身動きしたり、ひとりごとを呟いたりしはじめているのだった。それがこのままで終るはずがない。かれらはやがてもっと高い声で喋りはじめるだろう。生きていく過程で無視してきたことが、これからわたしに向ってはねかえってくることになるのだ。
わたしは立上ると跛をひきながら台所へむかい、カップ入りの酒をもうひとつとり出してきた。歯で金属箔をひきちぎりながら今夜は早くねむった方がいい、と思った。何も頑張って起きていてくれ、と頼んでいる者がいるわけではないのだ。こいつを一本飲んだら帰ろうと思った。
電話が鳴った。受話器をとりあげた。このオフィスを共同で借りている古沢からだった。
「今、苫小牧にいる」かれは蚊の鳴くような声でいった。「何か連絡事項はないか」「あのな」わたしは大声でいった。「例の靴下のやつだが、代理店のやつから連絡があって焼直して欲しいとさ。偉い人が煙草の火をおとしちゃったそうだ」「ああ」がっかりしたような声が聞えた。
「前のに合わせておれがやってみたが、それ、わたしていいだろう」「いいよ。あんたなら」元

気のない声がした。「よろしくたのむよ。こっちは吹雪でどうにもならん」
「だれの足だ？」わたしは大声でいった。「え？」古沢のとんちんかんな声がした。「あの写真の足だよ。えらくすんなりしていてきれいじゃないか」
「ああ、あれか……」古沢は声の調子をおとして、ためらうような様子をみせた。「あれはなあ……教えてもいいけれども」「あまりもったいぶるなよ」わたしはいった。「モデルじゃないことはすぐわかるがね。あんたの奥さんの足かね」「馬鹿いえ」かれは怒ったような声でいった。「何故知りたいんだ」「何故って……」そういわれるとわたしも判らなかった。「とてもきれいだからじゃないか」
「本当にそう思ったんだな」古沢は真剣な声でいった。「ああ」わたしはいった。「お前さんにわるい考えはないだろうから教えてやるが奥さんというのは、あたらずとも遠からじだ」かれはそこで一呼吸いれてからいった。「うちの奥さんの妹の足なんだ」「ああ、そうだったのか……」
たしかに肉体を写真にとらせるのを商売にしている者のものではない。とはいえ、何故古沢が、そんなに教えることにこだわったのか、そのときのわたしには判らなかった。
「おい郡司」電話が喋っていた。「おまえ、あれ採用になると思うか？」「さあね」わたしはいった。「新聞広告には一寸深刻すぎるんじゃないか？」「そうかなあ……」
わたしは電話を切り、部屋を出た。

2

闇のなかから優しさに震える声がわたしの名を呼んでいる。その声はずっと以前、よく聞いた

ことのある女の声だ。わたしは眼をあけて聞いている。闇は深いが、古い映画のフェイド・アウトになった一瞬のように、とぎれとぎれの光の雨が降りつづけていてわたしには奥がよく判らない。名を呼ばれている、名を呼ばれている……。わたしは立上ろうとするが、途端左足の膝が確信なくゆらぎ、わたしは顔から床へ落ちてしまう。しまった。そうだったのか。わたしは左手をのばして左足をさわってみる。力がない。足首を動かしてみようとするが、どこへ力を入れていいのか判らない。

女の声が悲しげにわたしの名を呼んでいる。幼いときの愛称で呼んでいる。立ちあがって八畳間を横切って自分のいるところまで歩いてきたら、わたしのためにドイツ製の三十六色の色鉛筆を買ってあげる、と約束している。もちろんグリコだって森永ミルクキャラメルだってお安い御用だ。

色鉛筆は欲しい、とわたしは思う。立上ろうとする。今度は注意深くしているので立てる。左足を前に出す。半ズボンからのびている左足は右にくらべると少し細くなっているように見える。体重をかける。あ。だめだ。膝がそのままねじれてしまう。

もんどり打ってひっくり返る。畳の藺草の匂いがする。

女のわたしを呼ぶけたたましい声がする。声は泣いている。泣いたってしかたがないのに。泣きながら、わたしが立つことができたことをほめている。だからもう一度試みようといっている。色鉛筆は必ず、わたしの父親が出張から帰ってきたらたのんで買ってきてもらうから、といっている。

立上る。左足を出す。力いっぱい突っぱって伸ばし、体重をのせ、できるだけ速く右足を前へ持っていこうとする。うまくいった！　右足に全体重を移すことができたのだ。しかし、力あま

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com